

統語的アスペクト補助動詞「-かけ」の意味機能

板東美智子 (滋賀大学)・日高俊夫 (九州国際大学)

bando@edu.shiga-u.ac.jp; t-hidaka@isb.kiu.ac.jp

1 はじめに

日本語の補助動詞「-かけ」は、形態的には動詞の連用形に接辞して複雑述語一語を形成する。例えば、「歩き-かけ(る)」、「ごはんを食べ-かけ(る)」などがある。統語的には VP を補部にとりそれ独自の主語を必要としないことから繰り上げ動詞に分類されている (cf. Nishigauchi (1993), 影山 (1993), 由本 (2005, 2013), 岸本 (2013), など)。さらに意味的には、接辞した VP のアスペクトの意味をその出来事の開始直前、あるいは、直後をみるように変化させる。以上より「-かけ」は統語的アスペクト補助動詞と呼ばれている。

しかし、「-かけ」がどのように動詞のアスペクトを変化させるかは、同じ動詞に接辞しても構文によって様々であり、一言では捉えにくい特徴を示す。

- (1) a. 花子が玄関を出て走りかけたところで、携帯がなった。
b. 花子が駅まで走りかけたら、雨が降ってきた。
c. 花子はそのマラソンコースをゴールまで走りかけたのに、手前で棄権した。

(1a) は「走る」という動作をまさに起こそうとする直前の時点を描いている。(1b) は「走り始めた直後」の解釈が一般的であろう。(1c) は長い「走る」動作がようやく終了する直前を表している。つまり、「走りかける」という複雑述語は文脈がないと「動作開始の直前」か「動作開始の直後」、あるいは、「動作終了の直前」の曖昧な解釈をもっていることになる。¹

本論文では、この統語的アスペクト補助動詞「-かけ」がどのような特徴の動詞に接辞化できるかその可否を観察したのち、可能な組み合わせの中で、なぜ上記のような曖昧性が生じるのかについて考察する。まず、「-かけ」

¹ 「V-かける」にはこの統語的アスペクト複合語の他に、本動詞「かける」の意味を残した「誘いかける」、「疑問を投げかける」などの語彙的複合語と呼ばれる種類もあるが (cf. 影山 (1993), 由本 (2013)), 本論では今回は扱わない。

の機能の語彙登録をクオリア構造 (Pustejovsky, 1995) を用いて仮定し、次に、補部にとる VP の意味的特徴と「-かけ」との構成性によって「動作開始の直前」、「動作開始の直後」、そして「動作終了の直前」のいずれかに決定されるメカニズムを提案する。

2 「V-かけ」構文の意味的特徴

「-かけ」が動詞のアスペクト的特徴を変化させる様子をもう少し詳細に観察するために、Vendler (1967) の動詞のアスペクト四分類ごとに「-かけ」を組み合わせてみよう。

まず、状態動詞と「-かけ」の組み合わせは不可のようだ。

- (2) a. *太郎は父親に似かけた。
b. *富士山がそびえかけている。

次に、到達動詞との組み合わせをみてみよう。

- (3) a. 電車が駅に着きかけた。
b. 道路の雪が解けかけた。

金田一 (1976) では瞬間動詞として特徴付けられている (3a) の「着く」のような開始時間と終了時間が同時に一瞬で生じる動詞に「-かけ」が付加すると、その出来事の直前を描く。つまり、(3a) では、電車はまだ駅に着いていない。一方、同じ到達動詞でも漸増 (あるいは、漸減) する主語をもつ到達動詞は、「-かけ」が付加すると、その出来事の直後を描く。つまり、(3b) では雪は少し解け始めている。

三番目に、活動動詞との組み合わせを観察する。活動動詞は、基本的にはその活動の始まりも終わりも含意せず、均質の行為を描く。

- (4) a. プロペラが回転しかけた。
b. 太郎が歩きかけた。

第1節で紹介したような具体的な文脈がないと活動動詞 + 「-かけ」は曖昧になってくる。(4a) はプロペラが回り始めた直後と一回転する直前の曖昧性がある。(4b) は太郎まだ歩き始めていないが、歩く気配を見せる動きをしているところである。あるいは、二歩歩いたところでも可能である。

最後に、達成動詞との組み合わせを観察する。達成動詞は語彙分解すると、二つの下位事象から成り、それぞれは因果関係 (CAUSE) という概念で結び付いている。CAUSE の原因事象は開始時点が明確な「活動」であり、結果事象はその活動の「到達」である (影山 2001: 8)。これにより、達成動詞の描く行為には始まりの時点があり、一定時間を経た終わりの時点がある。

(5) a. ダンボール箱を潰しかけた。

b. 板書を消しかけた。

(5a,b) とともに二通りに解釈できる。(5a) は箱を潰す動作を起こす直前とも解釈でき、また、例えば手を添えて少し圧力をかけ、少しだけ箱の形が変わった時点であるとも解釈できる。(5b) も同様に、消す動作をする前とも消す動作を始めた直後とも解釈できる。

以上の観察をまとめると、統語的アスペクト補助動詞は、

- 状態動詞には付加しない。
- 瞬間の到達動詞と付加すると、その出来事開始の直前を描く。
- 漸増／漸減の主語をもつ到達動詞、活動動詞、達成動詞と付加すると、出来事／行為の開始直前と直後の曖昧性が生じる。

次節では、「-かけ」の語彙登録にどのような意味の特徴が存在するかを Igarashi and Gunji (1998) をきっかけに考察し、その特徴をクオリア構造の枠組みを用いて提案する。次に、そのクオリア構造と動詞句との構成によって出来事や行為開始の直前、あるいは、直後、さらには、行為終了の直前の解釈が生じるメカニズムを分析する。

3 「-かけ」の意味機能

「驚きかけ (る)」がもう少しで「驚く」といった驚く出来事の直前を表し、「走りかけ (る)」がもう少しで「歩く」が実際はまだ歩いていないか、あるいは、歩き

始めたが一步を踏み出す直前のところを表すといった様子を表す「-かけ」の機能について形式化した先行研究に Igarashi and Gunji (1998) がある。Igarashi and Gunji は「-かけ」を View-Changing Verbal と分類し、その語彙登録を (6) と表記している。

$$(6) \left[\begin{array}{l} \text{verb} \\ \text{adjacent} \left\{ \left[\begin{array}{l} \text{verb} \\ \text{view} < \textcircled{1}, \textcircled{2} > \end{array} \right] \right\} \\ \text{temp} < \textcircled{3}, \textcircled{3}, \textcircled{3} > \end{array} \right]$$

where basic(①), ③ < ②, close(③, ①)
(Igarashi and Gunji 1998: 90)

(6) に瞬間動詞の「驚く」を構成すると、「驚く」は ① : the start time = ② : the end time であるから、「驚きかけ」は ③ < ② より、驚く出来事の開始の直前をみることになる。一方、(6) に時間幅をもつ「歩く」を構成すると、「歩きかけ」の見る時間 ③ は ③ < ②、close(③, ①) の条件より、開始直前直後をみることになる。Igarashi and Gunji (1998) が「-かけ」の意味機能に出来事の終了時点 ② を組み込んだことは重要である。これにより、瞬間動詞 + 「-かけ」が出来事の直前を描く事が説明される。しかし、活動動詞の場合は同様ではない。基本的には活動動詞は開始時点も終了時点も含意しない。さらに、その開始と終了の地点を明示すると少し容認生が落ちるようである。

(7) a. 赤ちゃんが、一步、歩きかけた。

b. ?赤ちゃんがソファから食卓まで歩きかけた。

c. 赤ちゃんが { *3 分間 / 3 分間で } 歩きかけた。

(7c) の「3 分間」のように時間副詞句と共起させてその開始直後、例えば 1 分以内、の歩行を描くことはできない。なお、「3 分間で」は共起可能であるが、その場合は歩行の開始直前まで辿りつくのに 3 分間かかったという意味である。

また、(8a) ようにの文脈なしで主語を「赤ちゃん」から「太郎」に変えると少し容認生が落ちる。² さらに、(8b, c) のように有界生のある距離や時間と共起させると非文法的になる。「1 時間で」は「1 時間」に比べると容認生が上がるが、(7c) の赤ちゃんの場合と同じ容認性ではない。

²これは我々が「赤ちゃんの歩行」と「太郎の歩行」を同じ歩行と認識していないからである。我々は、赤ちゃんの場合は一回の歩行動作を一単位のように焦点を当てて見ているが、大人の歩行については、そのような単位的見方はせず、移動の方に焦点を当てる読みの方が普通だからである。このような活動動詞の動作が「単位認定」できるかどうかについては稿を改めて議論する予定である。

- (8) a. ?太郎が、一步、歩きかけた。
 b. *太郎が大学から駅まで歩きかけた。
 c. 太郎が { *1 時間 / ?1 時間で } 歩きかけた。

(7b), (8b) より、活動動詞 + 「-かけ」にはその行為の開始時点と終了時点が関わっていない可能性がある。そして、文脈なしの「歩きかける」の主語は「太郎」より「赤ちゃん」の方が自然に響くのは、通常、「歩きかける」を発言するときは、赤ちゃんがつかまり立ちをして足を前に上げるなど、もうすぐ歩けるようになる気配を感じる、といった状況が読み込めるときである。そのような少し足を前に上げたようなところすでに「歩く」という行為の成立を認めるような時点があるのではないだろうか。他の例をみてみよう。

- (9) a. 氷がわずかに溶けかけた。
 b. *氷が完全に溶けかけた。

(9) は到達の非対格自動詞が漸増／漸減の主語を持つ例であるが、この氷の固まりのどこかがほんのわずかでも水になれば、我々は「溶けかけた」と言うのである。反対に、溶ける出来事が終了した場合、「溶けかけた」でその出来事終了の直前は描けない。

- (10) a. 赤ちゃんが一步、歩きかけた。
 b. *赤ちゃんが二、三步、歩きかけた。

(10a) では、我々が赤ちゃんが「歩いた」と見なせるには最初の一步が重要であり、「歩きかけた」はその直前の様子を描いている。(10b) のように赤ちゃんにとつては数歩も歩いてしまうと、まだ行為開始の直後であっても、大人が主語の場合に比べて「歩きかけた」とは言いにくい。

- (11) a. プロペラがやっと回転しかけた。
 b. *プロペラが三回転しかけた。

(11a) では、プロペラが少しでも動くはずっと回転するだろうと認められ、それは一回転する前である。その時点を「回転しかけた」と言っている。前例と同じく、三回転してしまうと回転開始直後でも不自然である。

- (12) a. 論文の最初のページを書きかけた。
 b. *論文を 4 ページ書きかけた。
 c. 論文の 4 ページ目を書きかけた。

達成動詞の「書く」も上記と同様の振る舞いをしている。(12c) のように「4 ページ目」と序数にすると文法的になるのは、各ページごとに出来事がリセットされているからと推測する。つまり、「1 ページ目を書く」と「4 ページ目を書く」はそれぞれ個別の行為とみなしている可能性がある。

以上より、本論では統語的アスペクト助動詞「-かけ」の意味登録には、VP が描く出来事が最初に生じたことと承認できる時点が関係しているということを提案する。

- (13) a. 初回最短承認時点
 (The Minimal Approved Point: MAP):
 動詞句が描く出来事が最初に生じたことと承認できる最短の時点
 b. 統語的アスペクト補助動詞「-かけ」の意味機能:
 動詞句が描く出来事の開始時点から MAP の時間幅において、MAP の直前の時点 p に視点を置く

次に、(13b) の「-かけ」の意味的機能をクオリア構造 (Pustejovsky, 1995) を用いて形式的に示す。日高 (2012)、日高・新井 (2012) のクオリア構造の表記方法によると、形式役割 (FORMAL role) と構成役割 (CONST role) を命題セクションに、目的役割 (TELIC role) と主題役割 (AGENTIVE role) を非命題セクションに分割している。この表記を「-かけ」の語彙登録に適用すると、「-かけ」がその補部 VP のアスペクトに変化をもたらすアスペクト情報は形式役割に記載され、「V-かけ」が生じた結果、その VP が持ち得る結果状態は目的役割に記載される事になるだろう (構成役割の「 ϕ 」は「かけ」自体は実質的な意味内容を持っていないことを示し、最終的にはそこに、先行動詞の意味が代入される)。

$$(14) \left[\begin{array}{l} \text{-kake} \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG} = \boxed{\text{[VP]}} \\ \text{Truth-conditional section} \\ \text{FORMAL} = \text{kake}(e) = p, \\ \text{where } p <_{\infty} \text{MAP}(e) \\ \text{CONST} = \phi \\ \text{Non-truth-conditional section} \\ \text{TELIC} = \boxed{\text{ : } e} \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \end{array} \right]$$

(14) の項構造 (ARGSTR) に瞬間動詞の VP 「駅に着く」が合成されるとすると、我々の「着く」の MAP は電車の先頭車両が駅ホームに少しでも入っている時点である。従って、「着きかける」はその直前の時点 p をみている。つまり、駅にまだ着いていない。「(一個の) 氷が溶ける」の MAP はその氷の表面が崩れて水がたま

り始める時点であろう。「氷が溶けかけた」はその MAP 直前であるから、氷の表面がわずかにでも濡れている時点と考えられる。「赤ちゃんが歩く」の MAP は上記のように一步を踏みしめた時点であり、「歩きかけた」はその一步を踏み出気配が感じられる時点か一步を踏み出した直後となる。「?*太郎が、一步、歩きかけた」が不自然な理由は、大人の場合、一步だけでは「歩く」に関する MAP が成立しにくいことにあると思われる。

さて、MAP は常に出来事の開始直後／直前とは限らない。終了時点と同じという場合もあり得る。第 1 節で紹介した例を (15a) に再掲する。

- (15) a. 花子はそのマラソンコースをゴールまで走りかけたのに、手前で棄権した。
 b. 花子はジョギングのために堤防を走りかけたのに、手前で電話がなってしまった。

(15a, b) の解釈の違いは MAP が文脈と相対的に決定されることによる。(15a) のマラソン競技の場合は、スタート時点からゴール時点までを「一つの走り」として承認されており、それが MAP である。従って、この場合の「走りかけた」はゴール直前となる。一方、(15b) では花子はまだ堤防を走っていないか堤防を少し走ったあたりの可能性が高い。これは、ジョギングのための堤防での走りなら堤防を少し走ったあたりで MAP が成立するためであろう。(15a, b) の「手前」の解釈は、それぞれ、走り終わりの「手前」と走り始めの「手前」ということになる。

最後に、上記で述べてきたように、MAP は相対的かつ主観的に決めている。MAP を客観的に統一した見解によって定式化することは難しい。一方で、主観的にきまるからこそ一人称を主語にした (16a) や心理動詞 (16b) の表現が可能になるとも言える。

- (16) a. 怒りでドアを蹴りかけたが、自分で自分を制止した。
 b. 花子はその知らせを聞いて驚きかけたが、平静を装った。

第三者にはその行為や感情が観察できない場合でも、(16a) の当事者、あるいは、(16b) の当事者視点をとってその行為や感情が観察できれば「蹴りかけた」、「驚きかけた」ということが可能なのである。

4 おわりに

本論では以下のことを提案した。

- 統語的アスペクト補助動詞「-かけ」が接辞する動詞の種類とそれぞれ接辞の結果生じる様々なアスペクト的意味を観察した。
- 瞬間の到達動詞と「-かけ」が組合わされると、出来事開始の直前を描く。
- 漸増あるいは漸減の主語名詞句をもつ到達動詞、活動動詞、そして、達成動詞と「-かけ」が組合わされると、出来事開始の直前、あるいは、直後の曖昧性が生じる。
- さらに、活動動詞と「-かけ」の組み合わせは文脈によっては、動作終了の直前の解釈もあり得る。
- 「動詞-かけ」が以上のような様々な意味が生じるメカニズムを出来事や動作の「初回最短承認時点」の概念と「-かけ」が語彙登録している意味機能を仮定することで説明した。

謝辞：本研究は、JSPS 科学研究費（基盤研究 C, 課題番号 24520424, 研究代表者 板東美智子）の助成を受けたものです。

参考文献

- Igarashi, Yoshiyuki and Takao Gunji (1998). The Temporal System in Japanese. In Gunji, Takao & Kōichi Hashida (Eds.), *Topics in Constraint-Based Grammar of Japanese*. 81—97. Kluwer Academic Publishers.
- 日高俊夫 (2012). *KLS 32*. 「日本語動詞における使役起動交替のメカニズム」 関西言語学会.
- 日高俊夫・新井文人 (2012). *LSJ*. 「V テイクの意味と派生について」 日本言語学会.
- 影山太郎 (1993). 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- 岸本秀樹 (2013). 「統語的複合動詞の格と統語特性」 影山太郎 (編), 『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』 143—183. ひつじ書房.
- 金田一春彦 (1976). 『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房.
- Nishigauchi, Taisuke (1993). Long Distance Passive, In Nobuko Hasegawa (Ed), *Japanese Syntax in Comparative Grammar*. 79—114. Kuro시오.
- Pustejovsky, James (1995). *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Vendler, Zeno (1967). *Linguistics in Philosophy*. Ithaca; Cornell University Press.
- 由本陽子 (2005). 『複合動詞・派生動詞の意味と統語』 . ひつじ書房.
- 由本陽子 (2013). 「語彙的複合動詞の生産性と 2 つの動詞の意味関係」 影山太郎 (編), 『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』 109—142. ひつじ書房.